

随想 「老年に思う」

先だって65回目の誕生日を迎えた。人口問題を考える場合、14歳未満を子供人口、15歳から64歳までを生産人口、65歳以上を高齢者人口というらしい。老年、老人、高齢などの意味を岩波広辞苑で確かめてみた。「年をとり、老いること。老齡」などとでており、明確な年齢は規定されていない。世間一般では、65歳以上を高齢者ないしは老年とよぶ。70年代後半ごろにつくられた熟年ということばは、老年の前すなわち中高年を意味するらしい。何はともあれ、立派に(?)老年に達した。



吉崎 繁

老年をどのように生きたらよいのか——ここ数日、頭の中を占めた。インターネットで老年、老人に関する成書を調べた。実に572件がヒットした。ほとんどが老人医療関係のもので、ついで多いのが生活設計関係のものだ。筆者の求めている老年の生き方に関するものはあまり見当たらない。結局、講談社新書 詫摩 武俊著「これからの老い」と、岩波書店 哲学Ⅱ 9 中務・高橋訳 キケロー選集「大カトー・老年について ラエリウス友情について 義務について」の2冊を求めた。

前者は、これから高齢者になるものに、年をとるということは、心がどのように変化していくのか、好ましい高年期を迎えるために、今からどんな準備をしておけばよいか、を平易に述べたものだ。自分というよりは老人一般の心理を理解する上で大変参考になった。

ついで後者を精読し、目から鱗が落ちるとはこのことか、と思った。著者のキケロー (Marcus Tullius Cicero 前106—前43) はローマの政治家、哲学者で、カティリナの弾劾に尽力し、2次の三頭政治をはさむ混乱期にあって共和制の護持に努めたが、アントニウスと対立して謀殺された。64歳であった。ギリシャの学術語をラテン語に翻訳して後世に伝えた功績で知られている。

彼の老年についての所説はこうだ。すなわち、自然は人間の一生を幼年期、少年期、青年期、壮年期、老年期というように見事に作り上げている。人生のほかの時期がよくて、老年期だけが悲惨などということがどうしてあり得ようか。もし老年期が厭わしいというなら、当人の品性が老境を嘆かわしくしているのであって、決して年齢そのものによるのではない。むしろ、老年こそ人生の最も充実した安穏な時期である。にもかかわらず、老年が評価されない理由は以下の四点に集約される。? 老年は仕事に対する熱意を失わせる。? 肉体が次第に弱ってくる。? 快樂の多くが遠ざかる。? 死と直面せねばならない。だが、これらは嘆かわしいことなのだろうか。彼はそのひとつひとつを検討する。? についていえば、確かに老年はある種の仕事に熱意を示さなくなるのは事実だ。しかし、それはあくまでも肉体の活力を必要とする仕事に対してであって、すべてにしり込みするわけではない。老人には老人にしかできないことが多くある。たとえば船仕事を見ればよい。航海するとき、あるものは帆柱に攀じ登り、他のものはデッキを駆け回り、別のものは夢中になって水をくみ出している。ひとり、艫に悠然と座って、舵を握っているものを見て、あいつは何もしていない、というにひとしい。舵手は若者のするような仕事こそしないが、それよりはるかに重要な役目を負っている。老人の仕事は、そうした舵手の任務だ。

? についてはいたしかたがない。しかし、動作の機敏さや肉体的な力は衰えても、それに代わって経験による知識や判断力が豊になってくる。これは老年でなければ得られない資格といえる。

? はどうか。何とありがたいことではないか。肉体的な快樂ほど人間を悩ませ、苦しめるものはないのだから。自分は肉欲を取り去ってくれた老年に深く感謝する。しかし、老人には快樂がすべて失われていると思うのは正しくない。老年には老年の楽しみがある。すなわち、心静かに研究し、思索するという楽しみである。「老いるにしたがって、学ぶところ、いよいよ多し」

とソローはうたっているのではないか。園芸や農事の楽しみもある。クセノポーンは農事こそ王者にふさわしい、といっている。

？だが、死と直面しているのは、なにも老人だけではない。死とは年齢にかかわらず、どんな世代にも共通した運命だ。不用意に死と出会うより、死を熟慮したうえでそれと対面する方がずっと好ましいではないか。だとすれば、老年こそ実に望ましい人生の時期といえる。

以上、キケロの「老年について」の所説を長々と紹介した。老年こそ人生で最も安らぎをおぼえる時期であり、そのように老年をとらえてこそ、人生は真に実りあるものになる、という彼の老年観に、二千年後に生きている筆者は深い感銘を受け、勇気づけられた。

孔子は、「七十にして、心欲するところに従えども矩を越えず」と語っている。七十まであと5年。老年を人生の残りものとは考えず、むしろ貴重な閑暇があり、平安に満ちた人生の収穫期であると評価して積極的に生き、心欲するところに従えども矩を越えない境地に一步でも近づきたいものだと思った。